

コミュニケーション能力を考える(3)

日本語の開国とコミュニケーション教育

村松 賢一

内向きのことばと外向きのことば

少し前になるが、夕方乗ったバスの中で感動的な光景に出会った。車内は学校や勤め帰りの乗客で身動きもとれないほど混んでいた。こんなとき、両手がふさがったまま、自分が降りる停留所が近づくと、誰か降

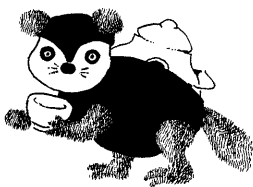
車ボタンを押してくれないかと気を揉む。チャイムが鳴るとほっとする。でもそれからが一大事だ。皆、人波を肩で掻き分けながら、大抵無言で出口に突進する。とあるバス停に近づいたときである。「すみません。誰かボタンを押してください」。小学生の男の子とおぼしき声があがった。なるほど、この車内では小

学生の手が伸びないだろう。応えるように、すぐ赤いランプがついた。感心が感動に変わったのはその後である。彼が即座に「ありがとうございます」と言ったのである。読者はこういう場面によく出くわすだろうか。私は長い通勤生活ではじめてであった。考えてみれば、当たり前の話で、こんな些細なことに感動する方が異常なのかもしれないが、無言化する都会では減多にお目にかかれない清々しいコミュニケーションの一瞬であった。降りていく姿を見ると、小学校も高学年の男子であった。日本も捨てたものではないなと思ったのは、外国でのあれこれの体験を思い出したからである。

カナダのスキー場でのことであった。ゲレンデを滑り降りてきたスキーヤーが何人も、リフト乗り場の行列に向かつて何やら大声で呼びかけるのだ。よく聞くと、「シングル?」と言っている。誰か一人で来ている人はいませんか、という意味だということがしばらく

くしてわかった。二人乗りのリフトに一人で乗るのはもったいない、またその方が待ち時間を節約できるという合理的な考えから出た知恵なのである。「イエー」という声があがると、即席のペアを組み仲良く相乗りして上がって行く。

また、別の場所にあるロープ式リフト（一本のロープが下から上へぐるぐる回っていて、スキーヤーは両手でロープをつかみながら上へ引っ張られていく）ではこんなこともあった。大勢の幼稚園児を引率してきた若い女の先生が、やはり、順番待ちの列に向かつて、「どなたか、子どもたちを連れていってくれる人はいませんか。子どもの扱いに慣れている方をお願いしたいんですが」と呼びかけたのである。すると、たちまち、何人かのボランティアが名乗り出



た。ほとんどが男性であった。彼らは、一人ずつ幼児を預かり、大きな身体に包みこむようにして、手際よく、無事子どもたちを連れ上げたのであった。これも、日本では考えにくいことだと思った。私たちは、普通の人間が、隣の人に話しかけるように、不特定の公衆に向かってメッセージを発するという習慣をもっていないといつてよい。混んだ車内に乗り込むときも降りるときも、すみませんの一言すら発しようとしないのだから。

それに比べて、と考え込んでしまった。あの携帯電話でのおしゃべりは何なのだろう。乗り物という公共的な空間にもかかわらず、誰はばかるとのならない大声をあげているではないか。この無言と饒舌は矛盾しないのだろうか。それとも、両者はメダルの裏表にすぎないのか。バスの中での愚考はしばらく続いた。

もう一つ、日本との違いに頭を殴られるようなシヨックを受けたことがある。仕事で二年ほど家族と

オーストラリアで暮らしたときのことである。帰国の日が近づいたある日、小学四年の息子の友達を招いてお別れ会をした。こういう場合、彼の地では、小さな客人を喜ばせるため、親があの手、この手の工夫を凝らすことを知った私たちは、近くのプールに連れて行ってミニ水泳大会を開くことを計画した。ところが当日、肝心の息子が熱を出して寝込んでしまったのである。日延べする余裕はなかったので、しかたなく、息子を家に置いたまま、五、六人のゲスト（なぜか全員男の子）とプールに出かけた。家に帰って、食事をし、ケーキを食べて（このときだけ息子が起きてきた）、今日は折角来てくれたのにご免ね、ちよつと早いけどこの辺でお開きに……といって送り出そうとしたときである。一人がこんなことを言い出した。「ミスター、ムラマツ、ちよつとお礼のスピーチをしたんだけどいい？」驚いた。プールでの彼らの悪がきぶりからは想像できない申し出だったからである。びっくり

して座り直した私たちに対して、彼は、ごく普通の調子で、次のように話した。今日はリュウ（息子の名）

が病気で残念だった。でもミスター、ムラマツがプールに連れて行ってくれてとても楽しかった。せっかく友達になれたのもうお別れなんて悲しい。でも僕たちはリュウと皆さんのことを決して忘れないでしょう。だから皆さんも僕たちのこと、それにオーストラリアのことをいつまでも忘れないでほしいんです。今日は本当にありがとうございました。彼に続いて全員が思い思いのことばの花束を贈ってくれた。エリート校の子弟ならいざしらず、みな、移民が多い地域の普通の小学校の子どもたちである。滞豪生活の中で、このときほどカルチャーショックを覚えたことはなかった。そして、ろくに彼らの来訪をねぎらうことなく帰そうとした我が言語文化の貧しさを恥じた。

どうやら、彼我のことばの使われようにはだいぶ違いがあるようである。私たちは、親しい相手、内側の

相手とは、たとえ公衆の面前であろうとよくしゃべるが、初対面の相手、外側の相手とは、たとえ、同じアパートに住んでいても知らん顔で通す。また、分かっていることはあえて口に出そうとせず、ことばを理解するより意図を察する能力を尊ぶ。どうも、ことばが内に向かって閉じているのである。ところが、私が住んだ外国では、ことばは、知らない者同士を結びつけるためにこそ存在するという趣があり、人間関係の維持より創出に力を発揮する。気持や心はことばに出さないと通じないと考えられ、一々明確に言い尽くす態度が好まれる。ことばが外に対して開かれているのである。これは、どちらがよいという問題ではない。文化や歴史の違いである。問題は、しかし、これからだ。国際化や価値観の多様化がすすみ、世代間のギャップが広がるにつれ、考えや習慣を異にする人々との共生が大きな課題となる。二一世紀を考えると、このままではとても思えない。これからは、これ

まで内向きに精練されてきた日本語を、外向きにも発達させていく努力がどうしても必要である。次に紹介する外国人の声は、そうしたことばの開国を私たちに迫っているような気がしてならない。しばらく耳を傾けてみよう。

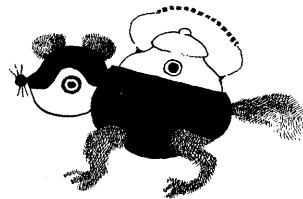
もとめられるコミュニケーションスタイルの変革

つい最近、新聞にこんな投書がのった。

私は去年、日本語を勉強するために日本に来ました。短い間ですが、ケニアと日本の違いが分かるようになりました。まず、ケニアの習慣では、知らない人にも、会った人にはあいさつをするのが普通です。とくに朝家を出るとき、道で知らない人でもあいさつの言葉をかけると、幸せな気持ちになります。つまり、あいさつは幸運を授ける言葉です。だから私は日本に来たばかりのころ、一カ月ばかりの間、毎日学校に行くときに、よく

日本人にあいさつの言葉をかけましたが、なかなかこたえてくれませんでした。おじさんたちは聞こえないふりをして速く歩いていく。若者たちは、ハンドバッグをしっかりと持って、怖い顔をして、たぶん私は頭がおかしいと思いつながら歩いていく。ところが、いつも朝ごみを出しに行く時に見かけるおばあさんたちは、よく「おはようございます」とか「行ってらっしゃい」とか言っていて、本当にうれしく、大変感謝しています。やはり、おばあさんたちの心は温かいです。(日本語学校生、二六歳。朝日新聞、九九・三・二九)

カナダでもオーストラリアでも、知らない人に声を



かけるのはマナー違反とはならなかったが、ケニアでもそうだとは知らなかった。通りすがりに目が合うと、にっこり微笑んで、いい天気ですねと声を掛け合う。最初は照れくさかったが、確かに何とも幸せな気持ちになるものだ。この例はまだ文化のちがいが、で済まされるかもしれないが、知らない相手には気軽に声をかけないという私たちの習慣は、留学生と日本人学生が一つ屋根の下で暮らそうとすると、深刻な誤解の原因になりかねない。数年前の新聞の投書である。

韓国にいた時、日本の若者と個人的に付き合うことがとても難しいと聞いていましたが、本当にこんなに大変だとは思いませんでした。(中略)

隣の部屋の日本人学生も、台所とトイレを一緒に使っているのに、今まで一回もあいさつをしたことがありません。アメリカ人が付き合いにくい日本人と親しくなるのに、食べ物を作って一緒に食べたという話をテレビで見て、私も隣の部屋の学

生に国の料理を作って一緒に食べながら親しく話をしようと思い、機会を何回も作りました。でも、結局、今も前と変わっていません。とても悲しいことだと思います。今まで十カ月間、がんばっても付き合うことが大変な日本の若者。一体、理由は何でしょうか。あと数カ月で私は国に帰りますが、最後に、もう一度声をかけてみようかなとも思っています。日本の若者よ、もっと心を開いてください。(朝日新聞、九三・一・二三)

これとそっくりの話は、筆者が勤務する大学の留学生たちからも幾度となく聞かされた。そのつど、別に外国人だからではなく、日本人同士でもよくあることであり、都会では他人の関わりをなるべく避ける傾向があるのだなどと説明するのだが、駅前の交番のおまわりさんにも明るく挨拶する彼らを納得させるのは難しい。実をいえば、いま全国の、日本人学生と留学生

が起居を共にする国際学生宿舍ではもっと問題が深刻で、たとえば、料理の後始末や冷蔵庫の管理、ごみ出しなど、共同生活の一つ一つのルールをめぐる軋轢が絶えず、時に感情的な対立にまで発展する例が少なくないといわれている。その大きな原因が、留学生と向き合い、議論することを避けようとする日本人学生の態度にあることは否めない事実である。そしてそれは、ひとり学生だけの責任ではない。仲間内で固まり、異質なものとコミュニケーションを厭う日本の風土と教育の欠如が生んだ結果である。現在、社会の至るところでグローバル・スタンダード（国際基準）が求められているが、それはこうした私たちのコミュニケーション様式にとっても例外ではないのである。

新たなコミュニケーション教育が必要

いま日本は、高文脈社会から低文脈社会へ急速に移行しつつあるといわれる。高文脈社会とは、一々こと

ばに出して言わなくても分かり合える社会である。低文脈社会とは、逆に、はっきりモノを言わないと通じない社会をいう。先にのべた、日本語を外向きに発達させる努力というのは、もちろんこのことと大きく重なるのだが、ことはそれほど簡単ではない。自己否定の痛みを伴わずしては達成できない問題だからである。どこから手をつけたらよいのだろうか。さしあたり、新たなコミュニケーション教育が必要だ、と思う。そのためには、国語教育を大きく転換しなければならぬ。それは単に「話すこと・聞くこと」を重視するというだけではない。中身が問題である。折角「話すこと・聞くこと」の時間を増やしても、従来のように、聞き手意識の希薄な「表現力」というとらえ方では、時代が求めるコミュニケーション能力は育てられない。詳述する余裕はないが（拙著『いま求められるコミュニケーション能力』明治図書を参照されたい）、他者との関係づくりという観点からことば教育

のカリキュラム全体を組み直す覚悟が必要である。

そのための第一歩は、ことばは、仲良し関係を強化するものではなく、自分とは考えも感じ方も価値観もときには文化さえも異なる他者と関係をとり結び、理解を共有するためにこそあるという認識を根底に据えることである。それには、教室の他者性と多様性が最大限保証されていることが前提である。一人一人が顔が違うように、自分の考え方、自分の感じ方をもつことが奨励されなければならない。教室の価値観が統一され、分かり合った者同士、同じような考えの者同士の集団になってはだめだ。学級が外部に開かれていて、異学年や地域のおじさん、おばさんと交流できることも重要な条件となる。そうした環境を整えた上で、分かり合う困難と通じる喜びを経験させ、ことばに対する信頼感を培うことを教育の中心目標に据えたい。これは、学校教育の変革に通じる大仕事である。が、もし、今、そのような努力を怠れば、低文脈化し

た社会はいよいよばらばらになり、外国人からの投書は、ここに紹介した程度ではとても済まない内容になってくるであろう。逆に、今、勇気をもってことばの開国に踏み出し、日本語を、異質なるものと心を通わせる媒体として鍛え直せば、二一世紀の日本人は、隣りに住む異文化の人々と闊達な議論を通じて問題解決に知恵を出し合うようになっていくに違いない。

そのときの日本語を想像するのは大変楽しい。一体どうなっているだろうか。想像力の乏しい筆者に明確なビジョンを描きだすことは難しいが、少なくとも、あいまいで、最後まで言い切らない今の姿とはいぶ様相が違ったものになっていることは確かである。

— 終 —

(お茶の水女子大学)